

●エッセイ特集・共産主義に想うこと

であるから、宮本氏個人にたいする強烈な感情をもつていて当然だと思われるが、それが不在なのである。なぜ宮本氏個人については書かれないのであろうか。

若い頃から蔵原惟人氏と親しく、蔵原氏の影響を強くうけてきた松本正雄氏の『過去と記憶』を読んだ。そこには「宮本顕治の登場」という一章が設けられている。宮本氏のことをまとめとめてみようとしている者にとつて、「宮本顕治の登場」というテーマは、きわめて魅力的である。章題を見ただけで固唾をのむくらいに緊張するといつても過言ではない。

しかし、この章題は、羊頭をかかけて狗肉を売る類のものである。読み終つて愕然とする。十九頁にわたつて書かれているこの章は、そのうち十五頁とい

うものが、まったく宮本氏とは縁もユカリもないことで埋められている。ようやく終りの方、四頁に宮本氏の姿がちらついただけである。それはまさに垣間見る程度であつて、それ以上ではない。

こんなことが書かれている。一九三〇年頃、松本氏は十人位の仲間と研究会をしていた。そこへ遅れて一人の若者が風のごとく入つてきた。紺がすりの和服を着、駒下駄をはいていた。キリッとした顔立ちをしていて見るからに清潔な感じをあたえた。「どなたですか」と松本氏

と答えた。空席に若者がすわると研究会はなにごともなかつたかのように、すすめられていった。二、三十分ぐらいたつたとき、若者は立ちあがつて、「失礼します」といって、風のごと

く去つていった。風のごとく来り、風のごとく立去つたというだけのことを書いたのが「宮本顕治の登場」である。

この章を読んで、いくつか私にわからないことがあつた。第一は、十九頁中十五頁が、まったく宮本氏に関係ないことが、「宮本顕治の登場」というテーマで書かれていることである。

第二は、宮本氏は遅刻しただけでなく、二、三十分ぐらい黙つて坐つていただけで、帰つてしまつたのであるが、そのことにたいして誰も、なんの感情も持たなかつたかのように書かれているのが奇妙である。とりわけ、松本氏がこの研究会において報告をしていたときに若者が遅れてきたのであり、この文章からすると、松本氏の報告が終らないうちに、若者は失礼したのである。松本氏は終始一貫

失礼されたのであるが、そのように感じたとき書かれていないのが奇妙至極なのである。

蔵原、神山、松本の三氏は、宮本氏個人についてほとんどなにとも語らない。人間宮本顕治の顔は、不思議なヴェールに包まれたままである。(慶大教授)

社会主義国の「自由」と素顔



中嶋 嶺雄

ソルジェニーツィン氏がソ連を開放されたとき、わが国のジャーナリズムも知識人たちも、等しくソ連の現体制を非難し、告発した。なかにはソ連を非難するあまり、その救済対象を中国に求めて中国を礼讃する意見

正論 一九七五年七月

もあつたが、当のソルジェニー
ツイン氏自身、今日の毛沢東中
国をスターリン体制の今日版だ
とみなしているのであるから、
このような見方は滑稽な見当は
ずれたといえよう。

私はこの冬、四年半ぶりにモ
スクワを訪れて、フルンチヨフ
時代への回顧というか、フルン
チヨフ再評価の気運がソ連の民
衆レベルではかなり根強いこと
を確認できたが、タテマエとし
てはソ氏が追放されねばならな
いような状況がありながら、現
実のソ連社会の底流は「自由」化
の方向へ大きく動いていること
を改めて実感した。最近のソ連
の学者や新聞記者たちは、タテ
マエにこだわらず、きわめて現
実主義的な本音を吐くことが多い。
つまり、彼ら自身、本心で
はタテマエを信じていないので
あり、従つてタテマエと現実の
乖離はきわめて大きい。

これにたいして、八年ぶりに
私が訪れた中国の状況は、タテ

マエと現実とがソ連にくらべた
らはるかに多く一致している。
従つて状況に弛緩はなく、自由
が活きる余地は少ない。ところが
中国の場合、その歴史と民族
性からして、専制体制には馴れ
つこになつてゐるし、そのよう
な専制のもとでのマグマのよう
な中国社会の基底には收拾不可
能な「自由」と無気力な混乱が
永いこと存在してきたために、
一とたび「自由」が解禁される
やこの「自由」は際限なく拡大
する傾向をもつてゐる。かつて
の「百家争鳴」運動や文化大革
命の一時期の状況がこのことを
示している。

これにたいし、中ソ両大国の
はさまに存在するモンゴルはど
うかという点、ここは圧倒的な
ソ連の影響下にあつて、いわば
タエマエだけの社会であるかの
ような印象を受けた。科学アカ
デミーの正面に依然としてスタ
ーリンの巨大な銅像が聳え立っ
ているという一事に象徴される

ような公式主義と教条主義がモ
ンゴル民族の大きな歴史の軌
跡とやらはらに今日のモンゴル
を支配しているといった状況で
あり、従つて牧民社会としての
未形成な集団主義は目につい
ても、思想や言論の「自由」はそ
もそも問題になり得ない。

私は、これら三カ国を訪れて
みて、このような「自由」につ
いての落差が旅行者にたいする
態度にも出てゐることを体験し
た。ソ連はもはや、空港、軍事
施設などを除き、どこでもカ
メラをかまえることができる。
中国では、かつて六六年秋の文
革時にくらべたら、カメラにた
いする許容度は大きく改善され
ていたが、ただホテルには、

「われわれはアントニオニを
許さない」という小冊子が必ず
置いてあるので、ショウウイン
ドリーのスポット・ライトを浴び
た場所以外の撮影にはやはり心
理的な重圧を感じざるを得なか
つた。しかし、この点でも、モ

ンゴルの厳しさは筆舌につくし
がたいものである。市内の目抜
き通りやモニュメントは自由に
写せるが、日曜青空市場や包の
集落、ラマ廟の堂内などのよう
な「素顔のモンゴル」をとらえ
ることはきわめて困難であり、
現代モンゴルの紹介者として著
名な碩学オーエン・ラティモア
教授でさえ例外ではないようであ
る。そのような状況であるか
ら、中蒙国境での写真（本誌五
月号のグラビア、参照）などは、
本来、望むべくもないものであ
り、フィルム検査にしても并当
りの中で調べられる。

ソ連も、中国も、そしてモン
ゴルも憲法上は言論、集会、出
版などの自由を保証してはいる
が、実態はそれぞれに厳しく
「自由」の範囲が異なるように、
ユーラシア大陸を縦貫するこれ
ら三つの社会主義国の素顔にた
いする許容度にも大きな違いが
あるのである。

（東外大助教授）